

れき ぶん

となん歴史民だより vol.38

Morioka tonan history and folklore museum

平成 26 年 3 月 28 日 発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228

市民参加展「鎌田コレクション 第4回旧暦ひなまつり展」4月13日(日)まで開催



是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○【特別寄稿】

古文書から学ぶ民話の話～
赤い腰巻の威力～

藤沢 昭子

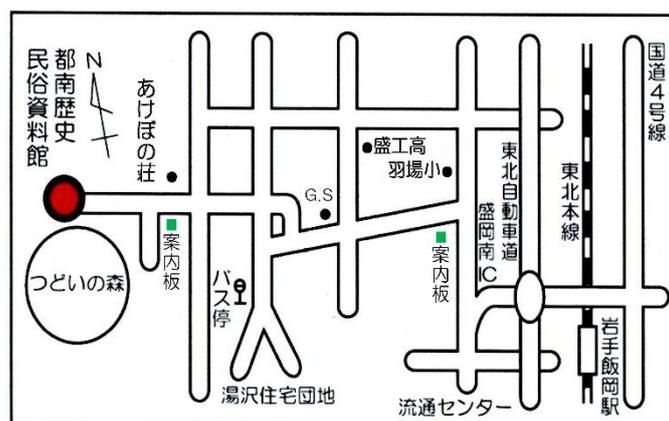
○当館企画展のご案内

○資料は語る㊼

○盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㊼

○となんの昔ばなし㊼

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間

午前 9 時から
午後 4 時まで

入館料

無 料

休館日

月曜日
(休日に当たるときは、直
近の平日)、年末年始

【特別寄稿】

古文書から学ぶ民俗の話～赤い腰巻の威力～

滝沢市陸大学「歴史教室」講師 藤沢昭子

旧都南村永井にある兼平家の事を調べておられる東京都にお住まいの〇氏からお電話をいただいたのが数年前のこと。「母方の兼平家の事を知ろうと年に数回、盛岡市都南歴史民俗資料館に寄贈されてある『兼平家文書』を見に来ているが、どのような方法でルーツを辿ればいいのかアドバイスをお願いしたい。」とのこと。地域の事を聞き取る際の私なりの方法を話している中で、大変興味のある事をお聞きした。

資料館に寄贈されてある古文書「明治三十四年旧十月二日ノ出火 火事見舞帳 紫波郡飯岡村大字永井兼平竹次郎六十歳」という横綴りの控帳を紹介していただいた。その控帳の記載によれば

要約

「明治34年11月12日、下永井地区は田畑の収穫も終わり、干し大根があり北西風が吹いている中、午前10時頃、数日前まで宮城県を中心とする陸軍大演習があり、兵士の輸送で列車の本数が増え、機鑑車（機関車）3台が通過。煙突からの火花が強風にあおられ、線路近くの家へ飛散し37戸のうち30戸が燃焼し、午後2時に鎮火した。

文書には、火事見舞の名前の記載末尾に12月28日、日本鉄道会社により30戸の被災宅に6千円の現金が給付されたとある。1戸に2百円の割合での見舞金である。1戸ずつ均等ではなかったようだが。」

この30戸の1戸であった兼平家が、〇氏の母方の御先祖にあたる兼平家かどうかは分からない。文書には線路と家らしき図が描かれていて、その上に文字を書いたと思われ現在の永井地区の住宅地図に重ねることは難しい。

「あのさあ、蒸気機関車からの火の粉で家が燃えたの」と、民俗の聞き取り調査を10数年続けている私は、被災地仮設訪問先の、また講座教室を受講されている70代以上の方に質問した。すると、「あったのす、当時は茅葺き家屋だから簡単に燃えだのっす。大分離れでいざ家にも風にあおられて火のついた茅が飛んでったのっす。登り坂の線路近くの家は、おっかねがったのっす。登り坂だと、石炭いっぺえくべて力つけて登っていぐど、火の粉がいっぺえ飛んできたもんだ。」

「近くで火事あるど、急いで赤い腰巻持って屋根さ結つけどもんだ。火除けのまじないだと言ってだもんだ。」

「女のシルシがついでいで汚ねえ方がいいんだと。」

「んだ、んだ。類焼まぬがれだ家もあれば、魔除けの利き目がなぐ焼けでしまった家もあったな。」今、70代後半から80代の方300人のうち50人くらいの方は、この「赤い腰巻」の話を見たり聞いたりしていた。炎に立ち向かう赤い腰巻が持つまじないの威力は、もうすでに民俗学者といわれる方々が研究されているかもしれない。

もう1つこの見舞帳に記載されてある「陸軍大演習ノ兵士ノ輸送列車三台、には、「第八師団ノ兵士帰途ニテ…」とあることから、翌年におきる「八甲田雪中行軍遭難事件」に遭遇した兵士も乗っていたのではな
いか。

盛岡市都南歴史民俗資料館にある古文書が時代の証言者となって語りかけてくる。

※今回特別寄稿いただいた藤沢昭子氏は、上記大学講師の他に一戸町と雫石町でも古文書講師を務めてい
る。

企画展のご案内

当館では、平成26年3月15日(土)～4月13日(日)の期間、市民参加展「鎌田コレクション 第4回旧暦
ひなまつり展」を開催しております。本展は、今年で4回目を迎える当館恒例の企画展となっており、この
時期の開催は盛岡の地域では月遅れで雛祭りを祝う風習があったことになっています。都南地域において
も、家々で雛人形や花巻人形を飾り、酒やお菓子を供えて女の子の行事を楽しみました。主な展示資料とし
ては、鎌田氏所蔵の古今雛のほか、小型や土鈴の雛人形、花巻人形などを多数展示しております。時代に
応じて、様々に変化する雛人形を楽しむことができます。また、昨年度より花巻市在住の西村氏が制作した貝
雛も合わせて展示しております。大小の貝に内裏雛を模した装飾を施したもので、1点1点丁寧に作られて
います。一足早い春を感じることでできる展示となっています。

短い開催期間となっておりますが、是非御来館くださ
い。



【次回企画展の予告】

合同企画展

「花巻人形展

—鎌田隆コレクションを中心に—

○開催期間

平成26年4月26日(土)～

6月15日(日)





【住友大萱生鉱業所 写真帖】

当資料は大正 12(1923)年に発行されたもので、住友合資会社経営期の資料です。

写真は白黒で、主な内容としては当時の事務所、機械場、万寿坑、関係者、舎宅、小学校など計 21 枚。大萱生金山は、全国的に見ても重要な鉱山の 1 つであり住友合資会社が同山を経営していたのは、大正 5(1916)年から鉱業権が移る昭和 19(1944)年までです。昭和に全盛期を迎え、矢巾駅まで伸びた鉄索により鉱石の運搬が効率的になり、昭和 10(1935)年には精錬所が完成し盛大な落成式が行われました。

大萱生金山は昭和 18(1943)年に休山、同 19 年に廃坑を余儀なくされましたが、同山の施設、設備、生活を語る重要な写真資料です。

参考：「都南村誌」、「大萱生金山のあゆみ」



旧第九十銀行本店本館 1 棟

盛岡出身の建築家である横濱勉の設計で、明治 43(1910)年に竣工しました。

煉瓦造による 2 階建てで、入口や窓には川目産の花崗岩の切石が使用されています。

2 階には広い総会室、1 階には営業室や応接室が設けられています。外観は、重厚感のあるロマネスク・リヴァイヴァル様式、内部はゼツェッション式の影響が表れた重要な近代建築物です。

現在は国指定重要文化財であり、「もりおか啄木・賢治青春館」として活用されています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『瀧源寺の枝垂桂(しだれかつら)・前編』

となんの昔ばなし三十八

早池峰山のふもと、岳というところに、妙泉寺というお寺がある。

昔、お盆が近いので小僧がお香を作るために桂の木に登り葉を取っていたが、落ちて気絶してしまった。

そこへ早池峰山の神瀬織津姫命という女神が現れ、

「お前はよく師匠のいっつけを守ってよい小僧だが、

桂が大木になるにつれ、葉を取るのが大変だろう。

私は、この山の中腹にある水無沢の山道の奥にある岩のくぼみに一本枝垂桂を育てておいたから、それを妙泉寺の境内に植えるといい」と

と言って、立ち去ってしまった。

小僧と和尚が水無沢に行くと、お告げ通り一本の桂があり二人は喜んでその木をお寺に移した。

住職が五、六代を経ると枝垂桂は大木になっていった。約二百年も経っているため、お寺を普請するとき三尺幅の戸板をこの木から作って使った。翌年春、

「せつかく育てた木を切ったのは残念なことだ。この木が絶えるのは惜しいこと。切り株から芽が出るから、それを大事にして多くの寺に分けるとよい」と、告げるのであった。

それから二、三日して不思議なことに、五、六本の芽が二尺ほどにも伸び、この霊木を有名なお寺に分けることになった。その一本を大萱生村の瀧源寺に送り、同寺の開山慶守和尚がよく手入れをして育てた。